4 ―みんなで横浜を考えよう

――市長から市民の皆さんへの手紙

Yさん、まったく時がたつのははやいもので、市の仕事についてから、もう八年になろうとしています。友人からは、最初の頃は若々しかったね、などとよく冷やかされます。たしかに白髪もふえたし、自分ながらずいぶん遠い距離を歩いてきたような気がします。ニューヨーク市のリンゼー市長は、最近出版した「都市」という本のなかで、「市長というものは、永遠に悲劇的なものだ」と、朝に反対の市民の声に攻められ、夕べに賛成の声に攻められ、日中は数分きざみのスケジュールに追われて、自分の時間はなにもないと慨嘆しているのを読みました。自分を悲劇的だというのではなく、同業者としてリンゼー市長の気持がよくわかるのです。また、いろいろ不満や要求をよせてくる市民の声を避けたいといっているのではありません。

私が朝から晩まで忙しいということは、なんといっても、いまの横浜市民にとって、いかに身のまわりの生活環境に不満や要求が多いかということでもあり、ニューヨーク同様、都市問題がいかに大変かということ

をあらわしていると思います。私は八年間一貫して、市民が内に思っていることを、なんでも自由に発言し市政に反映されるようにと願ってきたし、そうしたやり方を市政でとるようにしてきました。役所はこわいというイメージがあったり、そのために不満も言いだせないような都市は、けっして立派な市政が行なわれていないところです。実際、市民の要求したことが、一〇〇パーセント実現されるとは限りません。しかしなぜできないのか、どうしたらできるのかなど、役所と市民が一緒に話しあうことが大切です。これまで、住民集会や街頭相談などを何十回となくやってきたのは、こうした努力こそ市民のための市政をつくっていき、ひいては地域に民主主義を育てることになると信じているからです。そうしたことのために、私がどんなに忙しくなろうとも、けっしていといませんし、むしろ大歓迎です。市民の声で忙しければ忙しいほど、市長は悲劇的でなく幸福な人物ともいえましょう。市民から声もかけられない、見向きもされない市長こそ悲劇的です。

戦争と都市問題

横浜の特徴をひとくちにいうと、なんといっても急激な人口増加です。私が市長になったときは一六〇万人の市民の皆さんと呼びかけたものでした。それがいまでは二三〇万人にもなっているのです。このままの勢いでいくと、七、八年後には三〇〇万人になるでしょう。私は横浜に移り住んでこられた市民の方々に、とやかくいっているのではありません。東京を中心にこんなに過密な大都市圏に人口を集中させ、住宅難・地価騰貴をひきおこしてきた、政府のこれまでの都市政策の貧困に不満をのべたいのです。そして、横浜に新しい住居や職場を求めてこられた方々を心から歓迎しできるだけ快適な生活環境を提供してあげたいのです。そして、古くから住んでいる市民も、新しい市民も一緒になって、この横浜をどこにも負けないりっぱな都市にして、私たちが横浜に住むことを誇りうるよ

うにしたいのです。

こうした私たちの願いをはばむ、いろいろ困難な条件がたくさんあります。たとえば、やりたくてもお金がないこと、市に権限がないこと、法律でしばられていること、役所に残っている慣習など、数えあげるにきりのないほどです。そうしたなかで、現実は「棒ほど願って針ほどかない」のたとえみたいなものではありますが、それでも毎日精いっぱい努力しないわけにはいきません。

私たちはそうしたこれまでの努力のうえにたって、いやそうした体験をしているからこそ、いまこそ声を大きく、しかも大胆に、都市問題の重要さを全国に全世界に訴え、立ちあがるべき時ではないかと思います。いまや私たちをとりまく都市問題は、一つの都市や一人の市長の個人的努力によって解決できる状況ではありません。都市問題解決への挑戦こそ、私たちが戦後追求してきた平和への努力とともに、市民を生活から守り、人間性を回復するための最も重要な仕事であることを、厳しく確認する必要があると思います。このまま今日の都市の現状が推移していくならば、戦争が私たちにもたらしたよりもずっと深刻で、しかも回復に困難な生活の破壊と人間精神の荒廃をもたらしかねません。

これまでの人間の歴史のなかで、人間はいろんな危機に遭遇してきました。そのたびごとに人間はいくつかの選択に迫られてきたわけですが、そのなかでもっともしばしば、そして今日においても戦争か平和かという問題にぶつかってきました。今日の都市問題の解決は、そうした歴史的な選択と同様の重さをもって、私たちに都市における人間性の回復に挑戦するかどうかの決断を求めているといっていいすぎではないと思っています。

地域政治への関心を

どうもたいへん大上段ないい方になってしまいましたが、都市問題に挑戦するとか、都市に人間性を回復す

るといっても、むずかしいことをいったり、求めたりしているつもりはありません。都市問題の解決といういい方では、ともすれば、有名建築家の未来都市のようなビジョンや、役所のぶ厚い数字ばかり並んだマスタープランを思いうかべるでしょうが、そうではありません。都市問題というのは、私たちが毎日生活している場の具体的なことなのです。前に書かれている「家族と先生の会話」のなかで問題になっていたように、市民にとっては都市全体もさることながら、身近かな環境の問題が重要なのは当然です。下水の問題、通勤ラッシュの問題、学校の教室の問題、お勝手のゴミの問題など、その累積したものが都市問題なのだと思います。ですから、このような具体的なことを市政としてどう解決していくか、市民の一人一人がどのように考え、それを市なり県、また国に要求して改善させていくかが重要なのです。そこからしか、都市問題の解決の出発点はありません。

そうした立場から重要なことは、身近かな問題にまず関心をもつこと、そしてその原因がどこにあるかを考えていくことです。よくありがちなことですが、自分の前の道路さえよくなったら、あとはどうでもかまわないという人がいます。それだけであってはならないと思います。たしかに、いまは自分の生活を守ることで精いっぱいという人もいるでしょう。しかし、その段階にとどまらず、なぜできないのか、どうしたらできるか、を一緒に考える市民であって欲しいと思うのです。そのために、私たち市の方ではいつでも話し合いますし、考えたり勉強したりするため資料も提供します。私が機会あるごとにいっていることですが、政治を政治家にまかせたから、なんとかしてくれるだろうということではなく、二三〇万市民が私たちと一緒になってとりくんでいってほしいということなのです。都市問題の解決は、結局は一人の政治家の力によるものではなく、すべての市民の力を結集していく以外にないと信じているからです。その先頭にたって進むのが私の役割です。

前にものべたように、新しい市民がどんどんふえている横浜のような大都市では、市民が結集するといっても、地方都市とちがって、かなりむずかしいことです。横浜はベッドで、生活時間の大部分は東京にあり、地域の問題には関心がないという勤労者が多く、また古くからの市民、新しい市民が入りまじって、ひとくちに市民といってもいろいろな生活の状態があります。しかし、だからといって砂のように市民がバラバラであってよいはずはなく、横浜をよりよくするために、地域政治に対する強い関心と熱心な参加を求めないわけにはいきません。私は横浜に住んでおられる市民は、必ずやそうした期待にこたえてくれるはずだし、現実に方々でおこりはじめていることを感じています。この「市民生活白書」は、そうした市民の皆さんに、役立ててほしいと願ってつくられたものでもあります。

市民がつくるシビルミニマム

そこで私の一つの提案になりますが、都市問題に市民がすべて結集しようといっても、それぞれいろいろな問題をかかえており、ある場合は利害さえ異なることがあります。そのために、話しあうための土台、または共通の目標になるものが必要だと思います。そこで、私は市政にあたるものと市民が協力しあって、横浜における一つのシビルミニマムを作ってみてはどうかと思うのです。シビルミニマムというのは、どうも聞きなれない言葉ですが、「市民生活にとって必要最少限の環境基準」とでもいうことができます。すでに、東京都では都の一応のシビルミニマムをつくって、その達成のための中期計画を発表して実施しています。それ以来、シビルミニマムという考え方は、これまで経済成長だけが先行し、生活基盤の整備を無視してきたやり方に対して、市民生活と自治を重点にした新しい方向を示すものとして、高く評価される考え方になっているのは、ご存知の通りです。

シビルミニマムでは、たとえば市民生活にとって、公園は一人あたり何平方メートルが最低必要か、公民館

は人口何人当りに一カ所必要か、保育所はどうあらねばならないか、老人対策として何がどうなければならないか、などと具体的に必要な基準を定めることになります。そういうふうに、一つ一つの問題をとらえていくと、現実の都市生活の状態は、どこをとっても、まだ最低必要な条件を満たしていないわけですから、できあがったシビルミニマムは、おそらく達成すべき目標となってくるのは当然です。たとえば、ヨーロッパの都市では、上下水道が一〇〇パーセント完備し、公園が広々とつくられ、道路には必ず歩道があるのが都市としてあたりまえ、すなわちシビルミニマムになっているのです。そうしたシビルミニマムを、横浜市全体についてつくることはたいへんですから、小学校単位、あるいは中学校単位ぐらいの地域で、そこに住む市民の討論によって、自分たちの住んでいる地域の実態を分析し、ここの地域の環境は最低こうあるべきだという基準をつくってみてはどうでしょう。このようにして一つの区で、何十もの地域のシビルミニマムがつくられ、全区に共通するものをとりあげて、その区のシビルミニマムとし、さらに各区のそれを総合して横浜全体のシビルミニマムをつくっていったらよいと思います。

東京都は、役所のなかで学者などの協力によってシビルミニマムをつくり、都民にしめしました。その方法も一つのやり方ですが、私はむしろシビルミニマムをつくるのは市民が主体であり、市民が多数参加して、その討論のなかからできあがることの方が望ましいと思っています。つまり市民参加のミニマムづくりです。そして市役所は、その話しあいのための資料提供や事務的奉仕をしながら、市民と一緒に討論に参加し、市役所が上から押しつけることはできるだけ避けるべきだと思います。話しあいのある段階には、学者や専門家にも入ってもらったらよいと思います。

そうして、もし市民の手になるシビルミニマムができあがったら、どこからどんな順序で達成していくかについて話しあい、その結果を市政の計画として取り入

れたいと思います。もちろん、そのようなことを全市ですることは大変な仕事になりますが、しかし、そうした具体的な行動なしには、スローガンを叫んでも、都市問題は一向に解決しないし、市民のための都市づくり、都市における人間性回復にはなっていかないのではないでしょうか。市長という仕事は、上から市民に号令をかけるというのではなく、市民の話しあいのまとめ役になるのがもっとも大切なことであると思っています。

Yさん。将来の横浜の都市づくりの話をするつもりでしたが、わき道にそれたかもしれません。しかし、どんな都市づくりも、住民による自治の創造という立場を忘れては考えられないという気持を、私はますます強くしています。また、横浜市民はそうした住民自治のにない手たりうるりっぱな市民ばかりであると信じているからです。その意味で、私は都市問題の矛盾をもっとも多くかかえた都市の悩み多き市長であると同時に、悲劇的ではなくもっとも幸福な市長であると思っています。

長い手紙を書いていたら、夜もだいぶ更けてきました。明日も早くから日程がぎっしりなようですから、このへんで休むことにしましょう。そのうちまたご報告しましょう。

どうぞこれからもご健康におすごしください。